

読書に関するエッセー 入賞作品集 2017

《一般成人の部》最優秀賞

文字の「音」に誘われて

青木 偉 聖

喫茶店の天井から吊るされた電球は、ガラス細工のシェードにその身を包まれて、線香花火の火花にも似た細やかな光を室内に落としている。テーブルに届けられたグラスの中には、丸みを帯びた大粒の水が液面に浮かんで、その光を吸い込んでいる様にも見える。昼時はとうに過ぎて、落ち着きを取り戻した店内の一席でテーブルに広げたのは楽譜。五線譜の上を軽やかに、そして踊るように譜表された音符達が奏でるのはヴァイオリンソナタ第五番。音楽の世界を知らない僕には、譜面を目で追う事は出来ない。しかし、譜面を眺めていると聴こえてくる「音」がある。その音に耳を澄ませて僕は、対面の座席へと静かに目を移した。

小説にはテレビやラジオのような「音」は無い。しかし、だからこそ「文字」で表現される「音」は読み手の体験から想起されて、もしくは文字が持っている固有の意味合いから温度や形状、季節や色彩、そして記憶の中で眠っている感情までもが溶け合わり、より実感を伴って心に響くのではないか。三田誠広著、『春のソナタ』に描かれる音の表現は魔法のようで、小説の「読み手」を「聴き手」に変えてしまう。本作に登場する父子は共に音楽家であるが、家族としての会話は少ない。しかし、親子で思い出の曲を共演する一場面では、演奏が進むにつれて、楽器が織り成す音に誘われるかのように、言葉では伝えきれないかった二人の心を隔てていた壁は氷解していき、表情も和らいでいく。そうして、描かれた「文字」は「音」となり、聴こえてくるのは共に家族を想う「心根」で。だからなのだろう、その音色の美しさは音楽の世界へと足を踏み出したくなるような、素敵なきつかれを僕にプレゼントしてくれた。グラスに浮かんだ水が一回り小さくなり、コースターに僅かな染みを作り上げている。腕時計に目を落とせば、通い始めた音楽教室の開始時刻が近付いていた。グラスを傾けて一息で中身を空にする。広げていた譜面を鞆に仕舞い込んで、対面の座席に置かれた真新しいヴァイオリンケースを手を持つ。会計を済ませて店を出ると、四日市の街は晩秋の日暮れに染められて、行き交う人々の服装に間

も無く訪れる冬の匂いが感じられる。

一冊の本が巡りあわせてくれた音楽という世界。これから先、その場所でもどんな音が聴こえてくるのだろうか。沈黙したままのヴァイオリンケースの持ち手を握りしめて、歩く足を緩める。小説に登場する父子が奏でる、人の心へ「想い」を届けられるような演奏を出るようになるためには、長い年



『春のソナタ』

三田 誠広／著
集英社

月が必要なのだろう。しかし、もしも叶うのならば、演奏を聴いてもらいたい「相手」がいる。ヴァイオリンソナタ第五番、愛称スプリングソナタを口ずさみながら、音楽教室までの道のりを歩く。春を愛でるようなその節奏に彩られたもの、それは二十年以上も前に撮影された、アルバムに眠る一枚の家族写真真だ。

《一般成人の部》優秀賞

本の中の、もう一人の私

第一学院高等学校 三年

大野 裕 美

私は潔癖症だ。といっても一般的に言うような綺麗好きの極みではなく、精神的な方面の。例えばニュースで流れる事件の犯人について「なんでそんなことをしてしまったのか」「こうすればよかったのではないか」と議論している

声が嫌いだ。自分の知らない事情があるかもしれないのに、まるですべてを知っているような口ぶりがどうも気持ち悪く思えてしまう。他には、自分が誰かを嫌いになる気持ち。その感情すら汚いものだと思えて自己嫌悪に陥る。

太宰治の『女生徒』を読んだ時、ドキリとした。主人公がまるで私のような人だと思ったからだ。周りの人間が醜いと感じたり、そう思う自分が嫌いになったり、美しくありたいと思う気持ち。

またいくつか、考えに共通することがある。私も彼女も本を読む。本を読むことは良い事とされるが、それが原因で不安になることもある。

「ほんとうに私は、どれが本当の自分だかわからない。読む本がなくなつて、真似するお手本がなんにも見つからなくなつた時には、私は、いったいどうするんだらう。」

私の中身の九十九パーセントは本で出来ていると思う。本の及ぼす影響はぞつととする程大きくて、たまにどこまでが自分でどこからが本の内容、登場人物や筆者の考えなのかわからなくなる。

しかし改めて考えると、その不安はある程度解消できた。本は読んだ時点で、食べ物と同じように自分の胃で消化されて自分のものになっていると言つていいと思

う。野菜や牛肉をたくさん食べるからといって、人間がレタスや牛にならないように、本をたくさん読んでもそのまま自分の考えに加わるのではなく、一度頭の中でかみ砕かれて自分のものになっているからだ。

この考えを、どうやったら本の中の彼女に伝えられるだろう。きつと彼女は良い友人になれると思う。

どこかで「人間が本を読むのは、自分の考えていることを文章の中に探しているからだ」というような話を聞いたことがある。それから『女生徒』を読んで、改めて納得した。そこにはまさに私の考えが詰まっていたからだ。読んだ時、私の胸に自分の心の中を覗かれたような緊張と共に、「ああ、私と同じ感情を抱いている人がいるのだ」という安堵が広がった。

まるで約六十年前から私だけの為に送られてきたメッセージのように感じて、私と「女生徒」はすと重なった。

《一般成人の部》優秀賞

『ミラノ霧の風景』を読んで

廣瀬 安司

ちょうど五年前に突然、脳梗塞に襲われ床に伏した。でも幸いにも速い対応で、全く後遺症もなく快復した。以来、食事療法にも留意しながら、健康を取戻し好きな読書と永年の趣味を復活させた。

そんな頃、本屋で出会ったのがこの一冊。急いで帰宅。早速、耽読に陥る。

これまでの作家の随筆とは一味違った。はるかに遠くの失われた風景や時間、そして霧の向こうに消えていった人々のドラマを静かに、深みのある文章で読者に、あざやかに語りかけることで、自然と引き込まれ心地よいエッセイに会ったから、楽しみがふえた。

先生とはわずか一つ違いではあるが、わたしにとっては大先輩で、しかも上智大で教鞭をとつておられ、わが卒業校とは姉妹校に当り、懐かしく親しみを覚えた。

また旅の好きなわたしは、先生がかつてミラノに住んでおられたが、そこを皮切りに八日間の旅をしてきた。(二〇〇〇年・九月・七〇歳)

旅先のことを語るにしても、普通現況を語っているにすぎないが、先生の語り口は現地に住み、

多くの友人達が登場。興味深く自然に引き込まれ、感性豊かな文面に魅せられる。

それに加えて、もう一つ驚いたことがある。それはイタリア語の「ミラノ」と云う詩を先生が訳しておられたことにある。

「ミラノ」

石と霧のあいだで、ぼくは休日

を愉しむ

大聖堂の広場に憩う。星のかわりに

夜ごと ことばに灯がともる。

人生ほど、生きる疲れを癒してくれるものは、ない。

ウンバルト・サバ

須賀敦子訳

この訳を読んでいて、簡潔で含蓄のある知的な表現には、唯々感嘆するばかりだ。

十年以上暮らしたミラノの風物でなにか一番なつかしいかと聞かれたら、私は即座に「霧」とこたえるだろう……と。

デビュー作『ミラノ霧の風景』の文章を読み始めたとき、記憶のかたから何か大切なことをつかみとろうとする繊細な詩人の声を聞いたように思えた。もうこのときから心酔頻りとなる。

詩の翻訳もしかり、すべての随筆も卓越した美しい文章には悩殺させられる。

まさに「白眉」といえるうか。

イタリアの石畳の道を歩きながら、自らの経験を深めていった作家だ。透明感をたたえた美しい随筆家で、深い知性から生まれたと言える作家だ。わたしの憧れの作家でもある。



『太宰治文学館 4』 （『女生徒』収録）

太宰 治／著
日本図書センター



『ミラノ霧の風景』

須賀 敦子／著
白水社